

入賞

「時間の流れが教えてくれたこと」

福島県立ふたば未来学園中学校・2年 ワタナベ サキ 渡部 咲希

災害に強いインフラを作り、持続可能な形で産業を発展させイノベーションを推進する。
それがこれからの福島があるべき姿だと思う。

平成二十三年三月十一日十四時四十六分東日本大震災が発生した。私は当時四歳で震災時の記憶はほんの少ししか残っていないが、昨年十一月に母が実家の大熊町から持って帰ってきた時計を見て、何かすごく心に響くものがあった。震災から九年経っても十四時四十六分を指したままの時計はまるで震災当時の被害の大きさや人々の大変さを物語っているようだった。

私が住んでいた大熊町は震災の年の四月二十二日に町内全域が警戒区域に設定された。それから一年後の十二月十日に警戒区域が解除され、避難準備解除区域、居住制限区域、帰還困難区域の三つのエリアに分かれた。それからまた八年後の平成三十一年四月十日に居住制限区域と避難指示解除準備区域だったところの避難指示が一部解除された。これは町民にとってはとても大きいことだった。そして昨年の三月五日には大野駅周辺の避難指示が解除され、帰還困難区域だった地域の一部立入規制が緩和された。あの日止まったままだった時計は震災の足跡を忘れないと同時にこれからの福島が進んでいくことを表しているのかも知れない。震災から十年経って、私たちの生活は新型コロナウイルスに侵され、たくさんの方が緊張感に包まれながら毎日を過ごしている。震災があった十年前は、こんなことになるなんて誰も想像しておらず、何気なく日々を過ごしていた。あの日もそうだったのだと思う。震災があった日も。それまで、そんなことになるなんて思っておらず、たった一つのことによって福島が変わってしまった。そしてコロナ禍の今は日本が、世界がたった一つのウイルスのせいで肩身の狭い思いをしている。この十年で日本や世界ではたくさんの方が起きて、特にここ二年は世界が大きく変わった。町も同じよ

うにここ十年で大きく発展してきている。

そんな中で私は災害に強いインフラがあり、持続可能な形で産業が発展しているイノベーションを推進した町になって欲しいと思う。これから先どんな災害が起こるか分からない日本や世界に、震災を経験した福島だからこそできることがあると思う。福島から日本へ、日本から世界へ、災害が起きたとしても自分の大切な人を守るインフラを、福島が先駆けとなって作っていったとしたら、東日本大震災があったことにもちゃんと意味があったんだと思える。SDGsから考えた視点は今後世界がよりよくなるための架け橋だと思う。だからこそ私は福島に変わってもらいたいし、変えたいと思う。自分の大切な人達が安心して暮らしていける災害に強いインフラがある場所。そんなところに福島がなっていってくれたらいいと私は思う。大好きで大切な故郷がこれからもずっと誰からも愛される場所であってほしい。